

論文要旨

ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の処理、反応の仕方には、被検者の感情体験や情緒に関するパーソナリティが反映されると考えられている (Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)。慣例的に色彩情動仮説と呼ばれるこの解釈仮説については、医学的診断や質問紙法に基づく方法を中心に様々なアプローチによる妥当性の検討が行われてきた。しかし一貫した結果が得られていないことを理由にこの仮説の妥当性を疑問視する声もあり、さらなる検討が必要な状況にある。

第1章では、ロールシャッハ・テスト及び感情制御に関する研究のレビューを行い、これまでの実証研究を整理した。その結果、感情制御のプロセスモデル (Gross, 1998) を踏まえた検討を行うことで、ロールシャッハ反応の産出過程における色彩刺激の処理について明らかにできると考えられた。感情制御のプロセスモデルは、感情の生起から表出に至るまでの一連の過程を通じて、様々なポイントで段階的に感情が調整されることを想定する。本研究ではとりわけ、注意の方向づけ、認知的変化、反応調整の三つの調整過程に着目し、ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の処理過程を明らかにすることを目的とした。

第2章では、表情画像と情動語を刺激とした認知課題である Emotional Stroop task (EST) を用いることで、情動刺激への注意制御機能がロールシャッハ反応の産出にどのような影響を与えているのかについて検討した。この課題では、同時に呈示される表情画像を無視しつつ情動語の情動価を判断することを調査協力者に求める。表情画像と情動語の持つ情動価が不一致の条件では反応時間が遅れる傾向にあり、この反応時間の差 (干渉量) が大きいほど、情動刺激から注意を解放することが困難であると考えられる。色彩刺激の処理過程における情動刺激への注意制御の影響を明らかにすることを目的とした研究1では、色彩優位群 ($FC \leq CF + C$) が形態優位群 ($FC > CF + C$) に比べて高い干渉量を示すこと、干渉量が高い協力者ほど彩色図版上で INCOM が生じやすいことなどの結果が示された。また、EST の干渉量には情動刺激の処理の特徴が反映されるのか、あるいは情動的な処理を伴わない全般的な注意制御の個人差が反映されるのかが不明確であったことから、研究2では全ての図版に対する反応を分析対象とし、反応領域や形態水準に関する指標と干渉量の関連について検討を行った。その結果、研究1と同様、INCOM の産出数について有意な正の相関関係が認められた一方で、他の指標については有意な関連が認められなかったことから、ロールシャッハ・テストの反応産出過程と EST の干渉量における関連が単純な注意制御の処理から説明できるわけではないことが示唆された。最後に研究3では、干渉刺激の情動価を分けることで、ネガティブな刺激とポジティブな刺激それぞれに対する注意の向きやすさについて干渉量を算出し直し (ネガティブ干渉、ポジティブ干渉)、色彩刺激の処理との関連を検討した。研究1では形態優位群と色彩優位群の間に干渉量の有意差が認められたが、この傾向はポジティブな刺激による干渉によって生じていることが研究3より明らかになった。したがって、反応産出過程において快感情を刺激するような色彩に注意が向きやすいほど、色彩優位な反応が相対的に多く産出されることが示唆された。また、彩色図版上で INCOM についても研究1と同様に EST の干渉量と有意な相関関係が確認されており、とりわけネガティブな情動価を有する刺激による干渉が、その産出に関わっていることを明らかにした。

第3章では、Emotion Regulation Questionnaire 日本語版 (ERQ-J; 吉津・関口・雨宮, 2013) を用いて再評価方略と抑制方略の日常的な使用頻度について尋ね、ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の処理との関連について検討を行った (研究4)。はじめに、各方略の尺度得点が高い3名ずつ (再評価方略群、抑制方略群) を事例とし、ロールシャッハ・テスト上の反応特徴を探索的に検討した。事例検討の結果、再評価方略群は、CF や C といった色彩優位な反応をほとんど示さないこと、そして色彩に対して十分注

意が向き、有彩色が反応に取り入れられているものの、BI や At といった不快感情と関連するような反応内容は一切産出されないことなどの特徴を示した。また抑制方略群においても同様に CF の少なさが共通する特徴として確認されたが、C が産出されることもあることから、感情の表出に際して全く統制されないこともあると推測された。さらに抑制方略群には、BI や At、Fire といった情緒的性質を含んだ反応内容が多く産出される傾向が見られた。

これらの結果に基づき数量分析を行ったところ、次のような結果が得られた。色彩反応の反応数に関しては、両方略の尺度得点との間に有意な相関関係を示さなかったが、色彩優位群は形態優位群に比べて有意傾向水準 ($p < .10$) で高い抑制方略得点を示した。また相関分析の結果は、再評価方略得点は彩色図版上の PI や Pl.f といった植物反応の反応数と正の相関関係を示した。この結果は、不快感を刺激するような色彩に対して意味づけの変容を促すような認知的な操作を加えることで不快感情を低減し、ポジティブな感情状態を維持するようなプロセスが生じている可能性を呈示した。これは、再評価方略がポジティブ感情の増加に効果的であることを示すいくつかの研究報告 (Gross & John, 2003; Gross & Levenson, 1997) から支持される。

一方、抑制方略得点は彩色図版上での At や BI などの反応内容や、MOR、AG など主題に関するスコアと正の相関関係を示した。以上の結果より、抑制方略の使用は色彩優位な反応の産出に対しては抑制的に作用するが、その働きは体験される感情の低減には効果的ではない (Gross & John, 2003) ことから、反応内容や主題に情動性を伴う反応は増加する傾向にあることが示唆された。

第4章では、第2、3章で得られた結果について、数量研究からは把握できない反応のプロセスを検討するために4名の口・テストについて事例研究が行われた。ネガティブ干渉が大きく不快な刺激への注意制御が困難な事例『G』では、インクプロットの彩色から注意を逸らすことが難しく、その結果として損傷を伴う反応や、統合が上手くいかない不合理な反応が産出される様子が見受けられた。次に、高い再評価方略得点を示した事例『C』においては、コントロールされた形で色彩を反応に取り入れ、快感情を伴うような反応内容が多いことが特徴として確認された。一方で抑制方略得点が高かった事例『F』のプロトコルからは、色彩に対して過度に思えるほどのコントロールが加えられているが、反応を続けていくうちに体験される感情が高まる様子が見受けられた。最後に、ロールシャッハ反応の産出過程における各々の感情制御のプロセスの関連性について具体的な検討を行うため、干渉量が小さく、ERQ-J の両方略得点が高い事例『H』を選択し、事例検討を行った。その結果、FC が産出されるまでの認知処理の一端が明らかとなり、また色彩刺激に対するコントロールが生じる場面、状況を踏まえて反応産出過程を考察する必要があることが示された。

第5章の総合考察では、本論文の総括として各研究の要約を行い、その結果に基づき色彩刺激の処理過程について考察した。はじめに、反応産出過程で生じる多彩な感情制御について、図版上の刺激を知覚してから反応が産出されるまでの一連のプロセスから論じることでモデル化を試みた。とりわけ重要であった点として、図版上の色彩は被検者の様々な感情を刺激し得るが、どのような感情が生起するかによって、その後の制御過程は異なることが示唆された。例えば、快感情を刺激するような色彩に注意が向いた場合には、その色彩に対する制御過程は生じにくく、色彩優位な反応として産出されやすいことが推測される。一方で不快感情を生起させるような色彩刺激に注意が向いた際には、後続の過程でさらなる制御が行われる。具体的には、色彩の意味づけについて再解釈する、あるいは決定因として色彩を用いないといったプロセスを経て感情の調節がされていることが予想された。また、色彩反応の産出過程についても、受動的な体験として位置づけられる色彩刺激の知覚から継時的に形態が統合されていくプロセスが確認された。従来指摘されていた通り、受動的に色彩が知覚されるなかで能動的に形態と関わっていくことが、感情制

御における積極的な態度の表れとして解釈され得ることが本論文の結果より示された。加えて、彩色図版に対する反応の遅れが生じる要因について検討を行い、その解釈について考察した。

最後に、本論文が示した反応産出モデルについて、Exner (2003 中村・野田訳 2009)、辻 (1997) の反応産出モデル、そして Gross (1998) の感情制御のプロセスモデルとの対応を検討し、その位置づけに関する考察を行った。